

井上円了に「妖怪研究」という作品があります。

「妖怪研究は余が数年来従事せるところなるが、近ごろ応用心理学を講述するに当たり、あわせて妖怪の解釈を下し、ときどき実験をも施しけるに、事実の参考を要するものあれば、館外員諸君よりも事実の御報道にあずかりたく、左に妖怪の性質と種類とを掲記いたし候（そうろう）。

洋の東西を論ぜず、世の古今を問わず、宇宙物心の諸象中、普通の道理をもって解釈すべからざるものあり。これを妖怪といい、あるいは不思議と称す。その妖怪、不思議とするものにまた、あまたの種類ありし。現今、俗間に存するもの幾種あるを知らずといえども、しばらくこれを大別して二大種となす。すなわち、その第一種は内界より生ずるもの、第二種は外界に現ずるもの、これなり。しかしてまた、内界より生ずるものに二種ありて、他人の媒介を経てことさらに行うものと、自己の身心の上に自然に発するものの別あり。ゆえに、余は妖怪の種類を分かちて、左の三種となさんとす。」

と「幽霊、狐狸（こり）、犬神、天狗（てんぐ）、鬼火、妖星」などの外界に現ずるものである「第一種」、
「人相見、予言、祈祷（きとう）、催眠」などの他人の媒介によりて行うものである第二種、「夢、夜行、俗説、癡狂（てんきょう）」など自己の身心の上に発するものである「第三種」に分類し、

「以上の種類に関する事実御報道にあずかりたく、追ってその解釈は「講義録」中に掲載するか、あるいは特別に館外員講義相設け、講述いたすべく候。」と結んでいます。

今週の各紙コラムには、柳田国男の『遠野物語』の話が2題、中村苑子の『水妖詞館』の詩や東京国立博物館で開催中の『国宝・土偶展』の話が取り上げられており、何か井上円了の「以上の種類に関する事実御報道」に呼応していると、変な連想を抱いた次第です。

今年の景気は神頼みの回復を祈願する状況、大阪浪速の商売繁盛の神様「えべっさん」の愛称で親しまれる今宮戎神社（大阪市浪速区）の「十日えびす」、「宵えびす」、「本えびす」、「残り福」の3日間に、御利益を求めて多くの参拝客が溢れ、「商売繁盛でササ持ってこい」とおはやしがる境内で、参拝客は前年の福笹・熊手を奉納、新しい福笹・熊手を受ける為、ササを取り扱う金の烏帽子姿の福娘達は大忙しのようです。

神様を妖怪と較べたら罰当たりと思いますが、神様にも「外界に現ずる神」「他人の媒介によりて行う神」「自己の身心の上に発する神」とやはり三種いらっしゃる気がします。しかも、神様は、尊くも妖怪とは異なり、お独りで、全てを兼ね備えておられるような気がします。

えびす様は、古来より漁業の神（クジラ神）として敬われ、平安時代後期には、市場の神（市神）として祀ったという記録があり、鎌倉時代にも鶴岡八幡宮内に市神としてえびすを祀ったと云われています。その後、商業が発展するにつれ商売繁盛の神、福神として

も信仰されるようになり、現在では七福神の1柱として数えられています。

えびす様を、井上円了の「妖怪研究」に従って分析しますと、「第一種」の要素としては、犬神ならぬ鯨神、「第二種」の要素としては、神社に必ずある御神籤、「第三種」の要素としては、初夢に七福神の宝船の夢を見れば最高と、全ての要素を備えておられます。兎に角も、今年の景気、内閣府では、政策効果や海外景気の堅調推移を背景に、景気は持ち直しているとの判断を示していますが、ここに来て産業景気の先行きに不透明感が出てきているようです。

鉄鋼・非鉄や自動車などの輸出関連業種は最悪期から脱出したようですが、国内需要の低迷を反映し非製造業は、3分の2の業種が改善する見込みはなく、製造業が息切れすれば、景気改善の動きが途絶える懸念もあります。

現在、円高やデフレ傾向などの暗雲が漂い始め、企業を取り巻く環境は厳しく、最後は、「えべっさん」頼みなのでしょうか。



< 井上円了 (1858-1919年) >

仏教哲学者、教育家。越後長岡藩（現新潟県長岡市、合併前は新潟県三島郡越路町）生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。

多様な視点を育てる学問としての哲学に着目し、後に東洋大学となる哲学館や現在の京北学園の前身である京北中学校を創立した。

また、迷信を打破する立場から妖怪を研究し『妖怪学講義』などを著した。「お化け博士」、「妖怪博士」などと呼ばれた。

作品に、『靈魂不滅論』『妖怪学全集』『外道哲学 漢訳經典によるインド哲学研究』『世界旅行記』など多数。



< 柳田國男 (1875-1962) >

民俗学者。現・兵庫県福崎町生まれ。東京帝国大学法科大学卒業（法学士）。名誉町民第1号。正三位勲一等。

大学では農政学を学び、農商務省のエリート官僚となった後、講演旅行などで地方の実情に触れるうちに次第に民俗的なものへの関心を深めてゆき、当時欧米で流行していたスピリチュアリズムの影響を受け、日本でも起っていた「怪談ブーム」のさなかで当時新進作家だった佐々木喜善の招きで、岩手県遠野を訪れ『遠野物語』を執筆。



他に宮崎県椎葉などへの旅の後、郷土会をはじめ、雑誌「郷土研究」を創刊。民俗学の確立した。

その他著書に『蝸牛考』『桃太郎の誕生』『海上の道』『イタカ及びサンカ』など。

< 中村苑子 (1913-2001) >

俳人。静岡県出身。日本女子大中退。

昭和 24 年「春灯」に入会、久保田万太郎に師事。昭和 33 年高柳らと「俳句評論」を創刊。三橋鷹女)に傾倒し、老いや死をテーマに女性の情念をうたう。

昭和 50 年第 1 句集「水妖詞館」を刊行し、同年現代俳句協会賞。

平成 6 年「吟遊」で詩歌文学館賞、蛇笏(だこつ)賞。

日経：「1～3月の日経D I、1年ぶり低下 改善の業種なく」(1/4)

産業景気の先行きに不透明感が出てきた。30 業種の天気図を集計した「日経産業天気インデックス(日経D I)」は、2010 年 1～3 月期にマイナス 31.7 と、1 年(4 四半期)ぶりに低下する見通しだ。

日経D Iは天気図の「晴れ」から「雨」を 100 点からマイナス 100 点まで 50 点刻みに点数化し、平均して算出する。

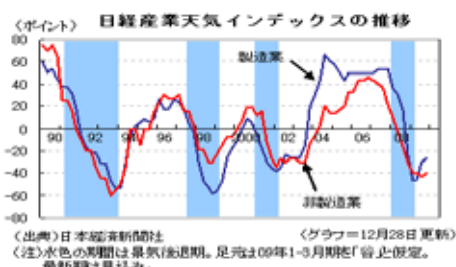
日経D Iが悪化するの、これまで日が差していたアミューズメントがほぼ 11 年ぶりに「曇り」に転落するため。1～3 月期には天気が改善する業種はなくなる。

内閣府は景気が持ち直しているとの判断を示しているが、背景には政策効果や海外景気の堅調推移がある。実際、日経D Iは昨年 10～12 月期まで 2 四半期連続、合わせて 13.3 ポイント改善した。鉄鋼・非鉄や自動車など輸出関連業種が上昇し、製造業主導で産業景気が最悪期から脱出したことを示した。

国内需要の低迷を反映し非製造業では 3 分の 2 の業種が「雨」か「小雨」。1～3 月期も D Iは 1994 年以來の低水準であるマイナス 43.3 で横ばいだ。

設備や雇用の過剰感は根強い。企業を取り巻く環境には円高やデフレ傾向など暗雲が漂い始めた。1～3 月期の製造業の D Iは 3.3 ポイント低下する見通し。製造業が息切れすれば、景気改善の動きが途絶える懸念がある。

ただ、10 年度の輸出は増加に転じるとというのが民間調査機関のコンセンサス。前回の景気回復局面でも製造業の D Iはいったん踊り場に差し掛かったが、崩れることなく再び上昇した。産業景気は回復基調を保てるのか、持続力が問われる局面を迎えている。



	全産業 (ポイント)	製造業 (ポイント)	非製造業 (ポイント)
日経産業天気インデックス			
2009年/01-03月	23.3	36.7	10.0
2009年/04-06月	13.3	30.0	▲3.3
2009年/07-09月	0.0	16.7	▲16.7
2009年/10-12月	▲26.7	▲23.3	▲30.0
2010年/01-03月	▲43.3	▲46.7	▲40.0
2009年/04-06月	▲43.3	▲46.7	▲40.0
2009年/07-09月	▲36.7	▲30.0	▲43.3
2009年/10-12月	▲30.0	▲16.7	▲43.3
2010年/01-03月	*▲31.7	*▲20.0	*▲43.3

(注) 1. 表中に*がある場合は速報値です。
2. 表中に▲がある場合はマイナスです。

天声人語：「伝承を文学として読む」(1/9)

「座敷わらし」が出る旅館として知られた岩手県二戸市の緑風荘が、去年の秋に全焼した。炎の中から赤い着物の子が飛び出し、母屋裏の神社に逃げ込んだと噂（うわさ）になった。神社は宿の看板と共に焼け残り、再建の動きを見守る。

東北に伝わる座敷わらしは、旧家に住みつく童子の精霊。かの『遠野（とおの）物語』はこの神の宿りたもう家は富貴自在なりということなり、つまり吉兆だと紹介した。日本の民俗学の原点とされる柳田国男の名著が出て、今年で100年になる。

農商務省の役人だった柳田の転機は33歳、岩手県遠野郷を出た佐々木喜善（きぜん）との出会いだ。柳田は、文学青年が訥々（とつとつ）と語る故郷の奇談や妖怪話に引き込まれ、聞き書きをし、現地を歩いた。

自費出版の初版は350部だった。河童（かっぱ）や天狗（てんぐ）、神隠しなど、夢と現（うつ）にまたがる話が文語体で並ぶ。「文学として読んできた」という三島由紀夫はこれ以上はないほど簡潔に、真実の刃物が無造作に抜き身で置かれてあると絶賛した。

実は京都や江戸から遠い地方に、豊かな文化がいくつも息づいていた。同様の伝承は各地にあるものの、誰かが書き残さねば、いずれは口と耳の間にこぼれ、消えていく。その意味で柳田が救ったものは大きい。文献より実地に重きを置く手法も生き続ける。

1世紀を経て、日本列島はほぼ均質の金太郎アメになった。方言までが危ういが、幸い、民話の数々は文字に起こされ、図書という安住の地を得ている。柳田の足跡も、座敷わらしの幻影も山里深くに抱き、遠野はいま雪の中にある。

<金太郎飴>

江戸時代中期（18世紀）に発明された練り飴の一種。

昔は祭りや市場で「金太郎さんが飴からでてきたよ」と言って売られ、子供達の人気の的であった。



どこを切っても、断面に金太郎の顔が現れる特徴より、人や意見について、杓子定規で個性がなく、どこを取っても同じようなことを「金太郎飴のようだ」という言い回しができてきた。

編集手帳：「貌が棲む気配」(1/9)

俳人、中村苑子さんに鏡を詠んだ句がある。貌（かお）が棲（す）む芒（すすき）の中の捨て鏡（第一句集『水妖詞館（すいようしかん）』より）。心に浮かんだ幻影にしても鬼気迫る情景で、ちょっと怖い。

落語などでは、鏡に向かって一心に化粧する女房を亭主が「忍術使いみたいな目エして」とからかうが、女性がときに激情を、ときに悲嘆をこめて見つめたであろう鏡には、「貌が棲む」気配が漂っても不思議ではない。

もしや、神秘のヴェールに包まれたあの女性の“貌”が、ちらりとでも棲んではまいかと、鏡の写真に目を凝らしてみる。大和王権初期の大王墓とされる奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳（3世紀末～4世紀初め）で、副葬された銅鏡の破片が大量に出土したという。

邪馬台国の女王・卑弥呼は中国・魏の皇帝から、魏の年号「正始（せいし）元年」に銅鏡を贈られたとされる。出土した破片には、その年号の銘文が入った鏡もあった。大和王権が邪馬台国と直接結びつく可能性も出てくるという。古代日本の国家の成り立ちを鏡がどう映し出すか、専門家の解明を楽しみに待つとしよう。

いまはまだ、謎が棲む古墳のなかの割れ鏡、である。

日経：「銅鏡、国内最多 81 面出土 奈良・桜井茶臼山古墳」(1/8)

初期ヤマト政権の大王級の墓とみられる奈良県桜井市の国史跡、桜井茶臼山古墳（3世紀末～4世紀初め）を再発掘した同県立橿原考古学研究所は7日、大量の青銅鏡の破片が新たに出土し、過去の発見分と合わせ少なくとも13種類の鏡が81面以上副葬されていたと発表した。一つの墳墓で出土した鏡数では福岡県の平原1号墓（40面）を上回り、国内最多の発見例となった。



「卑弥呼の鏡」との見方がある三角縁神獸鏡の破片も大量に出土した。大王級の巨大古墳で副葬品の実態が判明したのは初めてで、古代国家成立期の研究上、画期的資料となりそうだ。

今回確認された三角縁神獸鏡は26面で、そのうち一つの鏡片に「是」の字が刻んであり、蟹沢古墳（群馬県）で出土した魏の年号「正始元年（240年）」の銘鏡と字体や凹凸が一致し、同じ鋳型で製作された兄弟鏡と分かった。この字は「氏」に相当するとされ、作者とみられる「陳」の次に刻まれていた。

余録：「土偶のパワー」(1/7)

縄文人の平均寿命はどれくらいだったのか。何と男女ともわずか14.6歳という推計がある。途方もなく高い乳幼児死亡率のせいである。では15歳まで生きた男女の平均余命はどうか。これとて男16.1年、女16.3年で、平均で31歳ぐらいの寿命だった。

そのデータを紹介している鬼頭宏著「人口から読む日本の歴史」によると、この縄文人の短命は狩猟採集民としてはそう珍しいものではないそうだ。しかしこのような社会が一定の人口を維持するには著しく高い出生率が求められるという。

縄文人の推計にあてはめると、15歳以上の女性が平均余命いっぱいの16年間にわたり2年に1回の割で出産せねばならない。出産そのものが危険な厳しい生存環境の中で、いわば人の限界に近い出生率を保つのが集団存続の最低条件だった。

そんな縄文人の生命への祈りを宿した土偶である。東京・上野公園の東京国立博物館で開催中の「国宝・土偶展」(2月21日まで)は昨秋に大英博物館で開かれた「ザ・パワー・オブ・ドグー」の帰国展だ。そこで土偶のパワーに打たれた。

出品されているのは、宇宙人のような「遮光器土偶」はじめ多彩な造形がそれぞれに目を引く土偶など67点だ。とくにふくよかな「縄文のビーナス」文様が美しい「中空土偶」、ひざを立てて祈る出産の姿といわれる「合掌土偶」の国宝3点が一堂に会したのは初のことという。

どう使われたのか、実際にはまだ謎の多い土偶である。だがそのすべてが女性との話を聞き、乳房や腹部が強調された造形を見ればやはり多産や豊穡(ほうじょう)への切実な祈りが胸に響く。縄文の生命の脈動に何か励まされる展観だ。

< 国宝・土偶展 >

『ひとがた』をした素焼きの土製品「土偶」の発生は、縄文時代草創期(約13,000年前)にまでさかのぼります。伸びやかに両手を上げるもの、出産間近の女性の姿を表すもの、極端に強調された大きな顔面のものなど、多様な姿かたちをする土偶は「祈りの造形」とも称され、縄文時代の人々の精神世界や信仰のあり方を表す芸術品として、世界的に高い評価を得ています。

本展は、イギリスの大英博物館で2009年9月10日から11月22日まで開催されるTHE POWER OF DOGUの帰国記念展で、国宝3件と多数の重要文化財・重要美術品を含む全67件で構成されます。縄文時代早期から弥生時代中期にわたる日本の代表的な土偶とその関連資料を一堂に会し、土偶の発生から盛行そして衰退までの過程を辿るとともに、その個性豊かな造形美に迫ります。

